

善光寺縁起書二目録

伊地知氏書冊



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

一 月蓋長志姫の病に於て依り西條にありし事

二 此の事の因縁ありし事

三 秋の河津池に於て誓願をなしたる事

四 河津池に於て誓願の事

五 娘并國中に病人を服せし事

六 徳天吾神に於て誓願をなしたる事

七 目連菩薩に於て誓願をなしたる事

八 目連菩薩に於て誓願をなしたる事

九 徳王目連に於て誓願をなしたる事

十 善光寺に於て誓願をなしたる事

十一 月書長志令終 并 長志百海國に再出の事

必 本百海國は利益

十二 本百海國にあり

十三 本百海國にあり

十四 本百海國の起

十五 推め王本百海國にあり 并 牒状

十六 推め王の長百海國の列と出て入水并必本百海國に非波

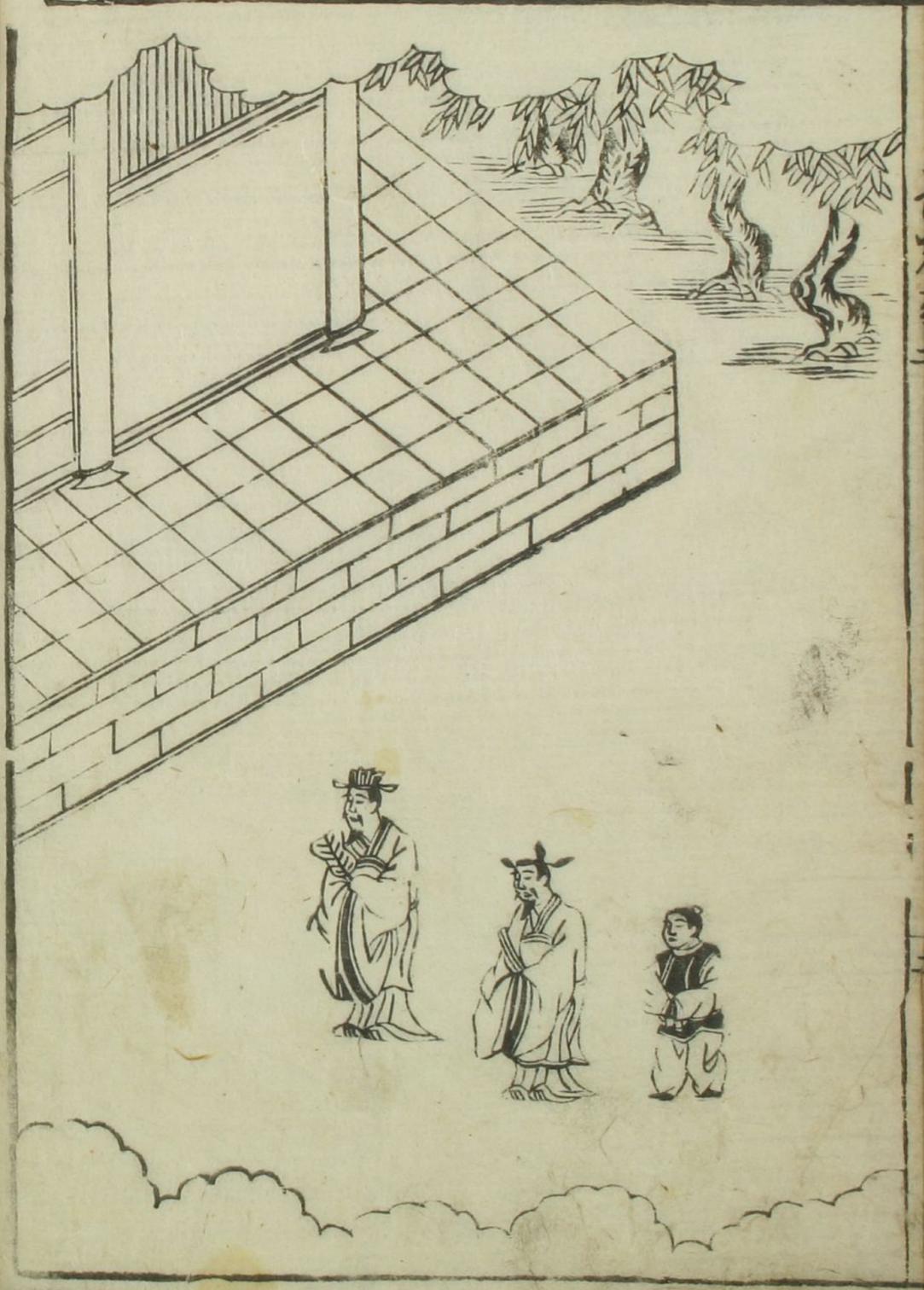
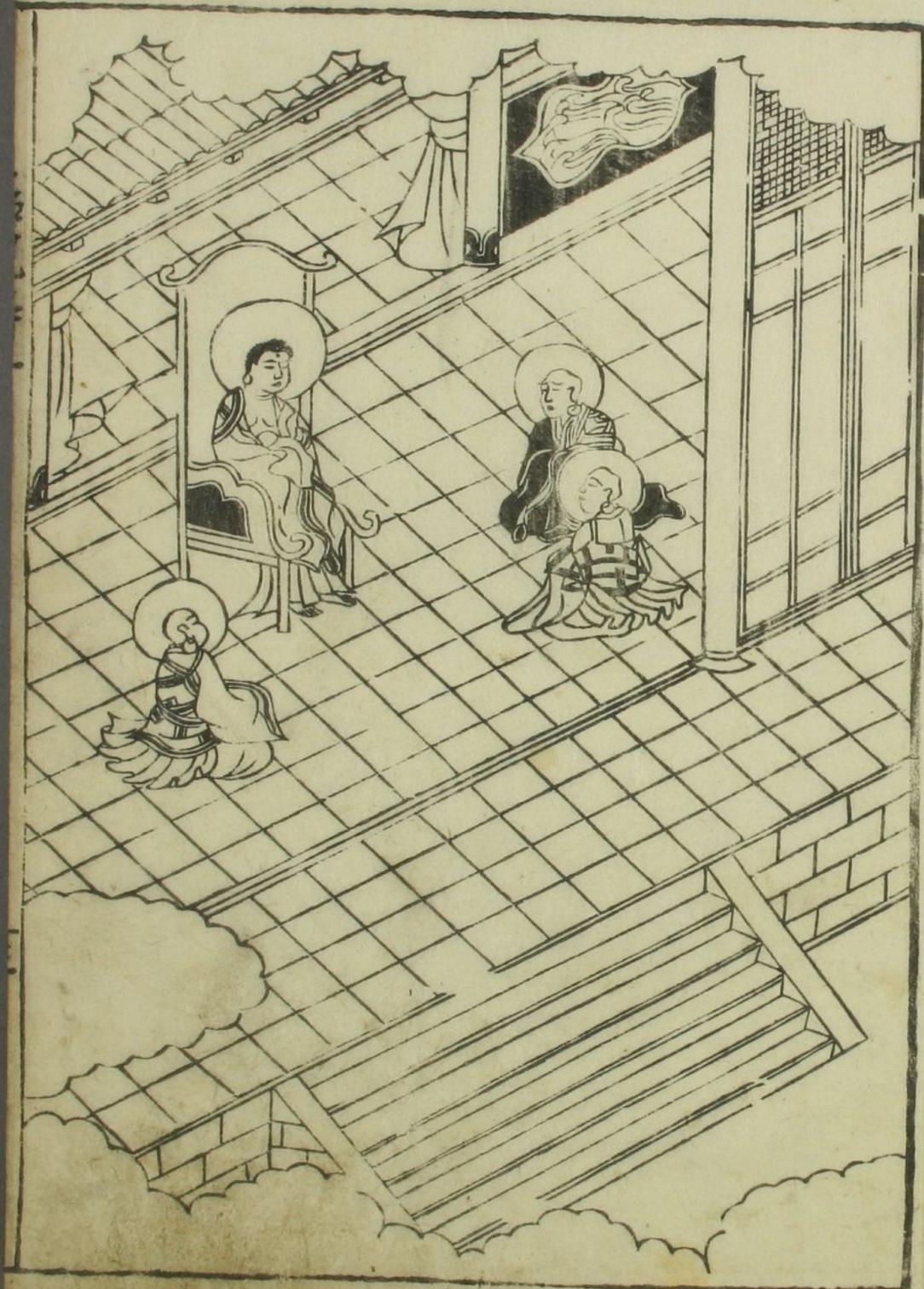
百海國の事

善光寺縁起書二

百海國利益の事



一 長志人のいふにありては、
同に本縁づくして、
これありては、
よりこれとありては、
にありては、
に退れり、
よりありては、
まひるに、
月書ありては、
さして佛の海に、



あふまれば長きこの河野に縁と遍れより行
 まりてほ悔の涙とめめいし程なく糖舎に
 ころろけほけは首と首とて此の池おにやうりも
 てれとる一書とわんかし中さの相好と詳しう
 を河野の長きこの河野に縁と遍れよりのつて
 に来れどもと長き春のけりる雨雲命頂れまじり
 世のあにんりあひつるもあしとまうくあまの
 縁にうりそめおの天慈痛とけ若痛憶れらるる
 さぬらに悲びに療業の者望にましくひらくこと
 どもを醫術もまにさる一あくめして風をりあふ
 ありあにうらうらごとく今に大醫もこの法業とこの

まうのほろ倦な一あめを軽くはる事たうの長
 照納文一あしおまご倦はる父母が業部とも清威
 しくひめう痛もあまのしたまひと印國中人民の
 痛若ともものごとく念をあつこと涙らよのり
 仏のたまうけがまよは今の命と神のり中りま
 候な一あめらる業部の痛たはくことうあひるこ
 切病生れ痛若にをわていりてり物えざる人しり
 業部世界の念を定離生志必滅のをこそなれがた
 うらこのたとのうんやとあまのりさるるは
 おにまを必滅の祀とれひあうらたあなり父母と
 一々慳貪物見とひらうへ一々の道のうらあ

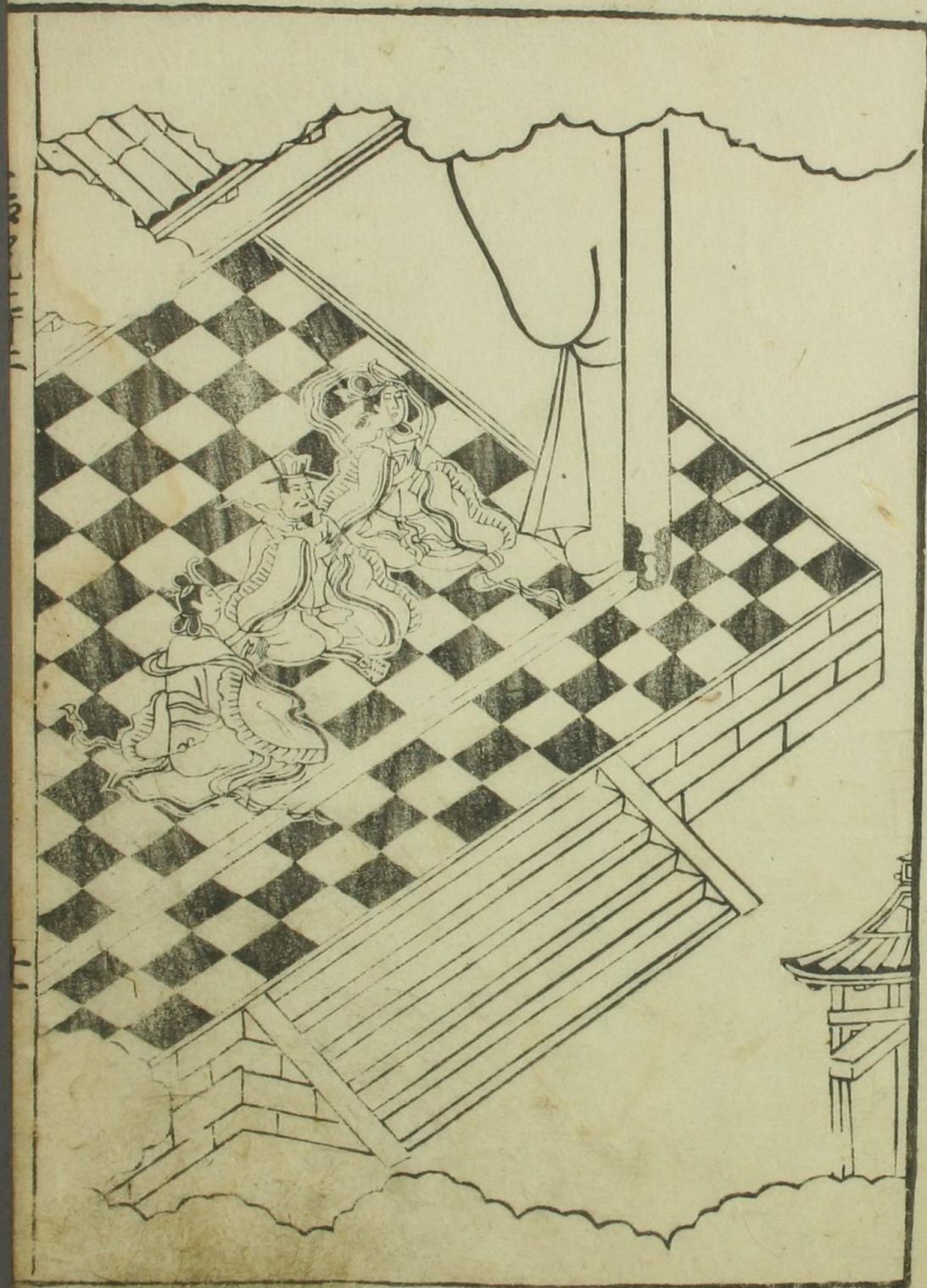
女子れやまひしむらめまやう郷中の人民もごとく
く本服とて一とめたまひく長きひはとうけいあ
つらたらにちうとまえてまらふとわらひみり
せると教れしまのゆ美し心清浄れはとあつた
けてあまにむいまりて青華梵めと信しとん
に海令しとれとまし一はれれ伽陀とぞとるあつら

願救我苦厄
普放淨光明

大悲覆一切
滅除癡闇冥

四阿に忽あ方極未世界の阿は級あす長まらつん
中とわらひたまひして十念のしなれあつた六十が
由他植河海由旬の相好と畧して二尺六寸の形

とまめしたまひたの阿にわらひて
まにの級を要はすましく刹那のうちに月菩薩とまらつた
れ様はよ現したまひ十二のたまひとまらつて思合
離れとてまらしたまひしう八回圖とまらつて金也とま
しう河大城もあまらるる勢あつたゆる人民のうらま
そらあぬにてまられまらるる苦をまのまらつたま
まらるる押ひははれまらるる自給の徳にまらつたま
たまらぬまらるるのまらるるまらるるのまらるる
大摩羅刹神疫神のまらるるまらるるのまらるる
はまらにあひてまらるるのまらるるのまらるる
る敬くはらるるまらるるのまらるるのまらるる



佛經故事

五

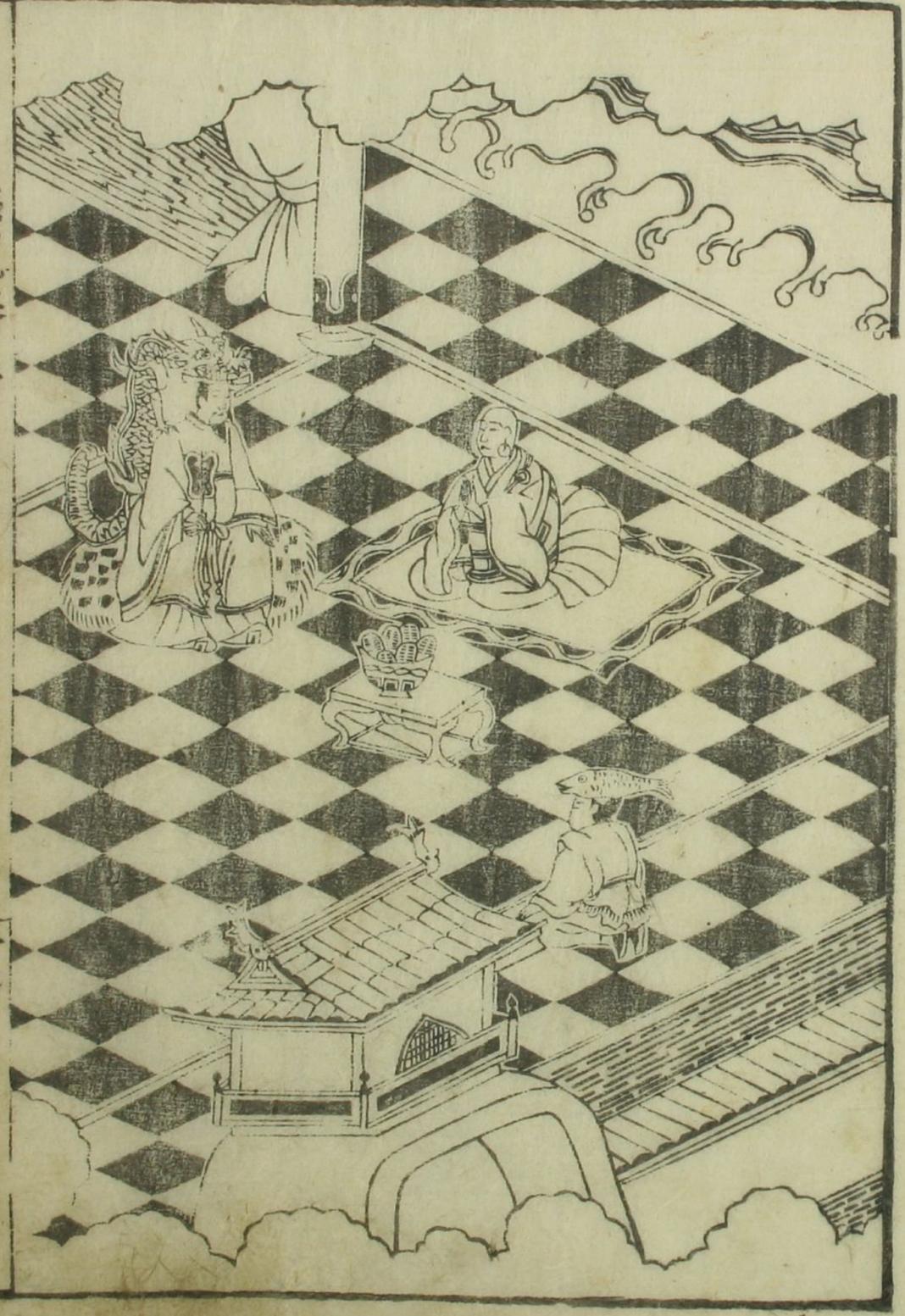
にうでうのちひもらん
たましく中々の時は長きに
ねぐひ昔強くは務まれば
とつて深うのしと深う
い金かたもはせにあり
ハ神母の所深うありて
連ものしてははらへて
しとのいまありて
うごひてははらへて
旬は海うのしと深う
くしてたとし神母ありて

者うごひてははらへて
とつて深うのしと深う
にひいありてははらへて
おれははらへてははらへて
あんどははらへてははらへて
あつめとてははらへて
てたははらへてははらへて
右のありてははらへて
肝と滑したるははらへて
目連のありてははらへて
足ははらへてははらへて

此門の内には公方御下れに龍を蔵せりて
くも獲たりたり御下れに龍を蔵せりて
とつらりおれは金持なりて
龍の蔵に虫のさしこれよりけ
糸竹のさしは
とてえ蘭の射のさしは
春房のさしは
かたにまされらるは
とていより入るのさしは
て塵のさしは
赤衣は友人のさしは
備は梅のさしは

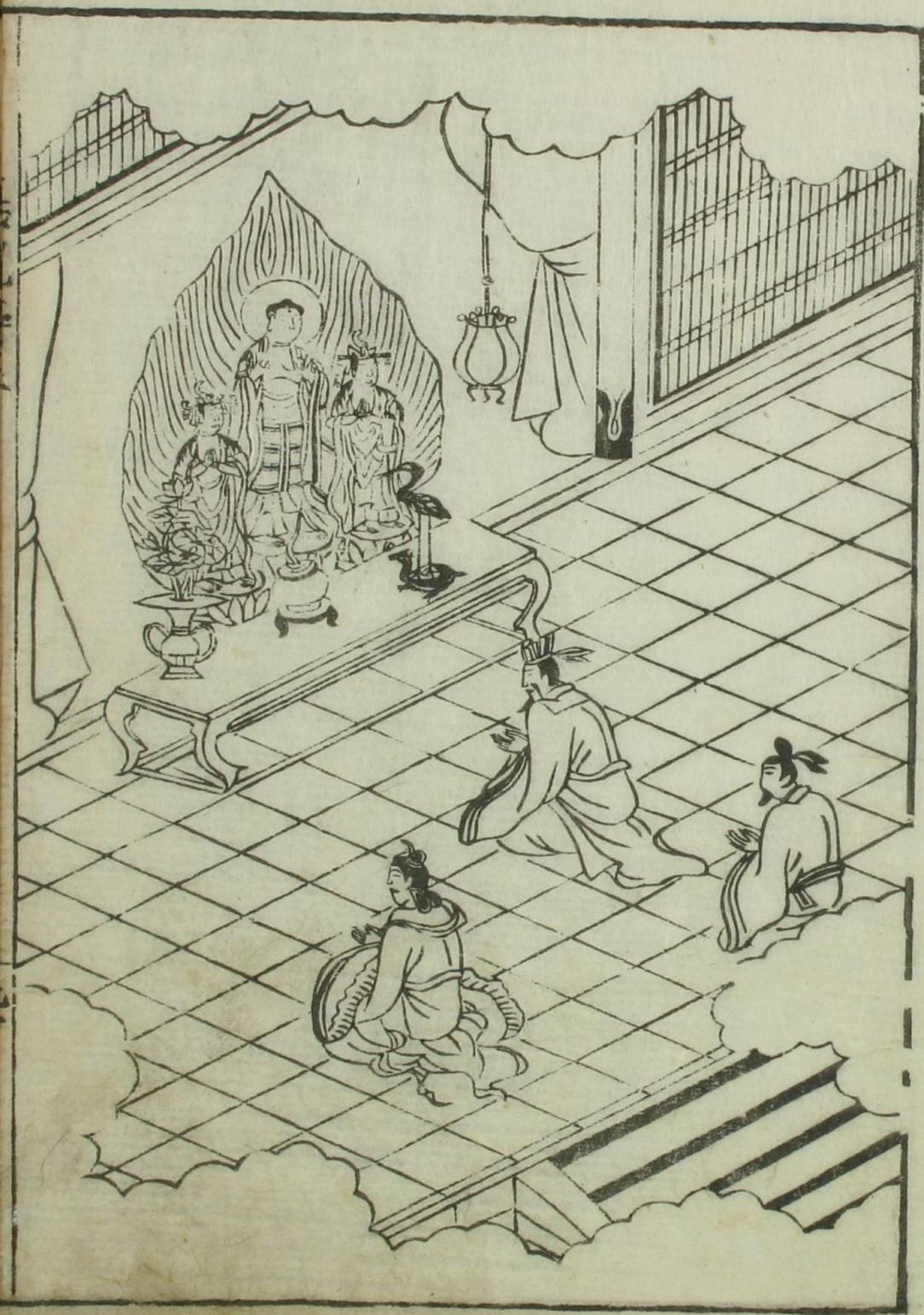
何自連そのまは物のおもひ
世そののほは
づらひとて
龍のさしは
の龍のさしは
らり自連の物
備は梅のさしは
と押さ
ては龍のさしは
らそののさしは
のさしは

うらやまの金車しりハ誠よび去にをめてま一のまき家
 ろつまびちたにの田畠またぐもびのりかればまねの
 るりあく園に暮らされど猶布れ教と調とるること
 ろよびそらまおにわらるるもい金の活用にて
 各人のをのづらう出なしてまよるることなしたまひ
 此の扱金とあるるも送りつらうはるるもなごころか
 ろしころあまののりつらう目連おほいさひあまら
 ろんおのになめておほいさひにたつらうのちのり
 けらにらるるまおしづらうれいあつらうとまら
 ろしつらうのりつらうのちのりつらうのちのりつらう
 ろしつらうのりつらうのちのりつらうのちのりつらう
 ろしつらうのりつらうのちのりつらうのちのりつらう

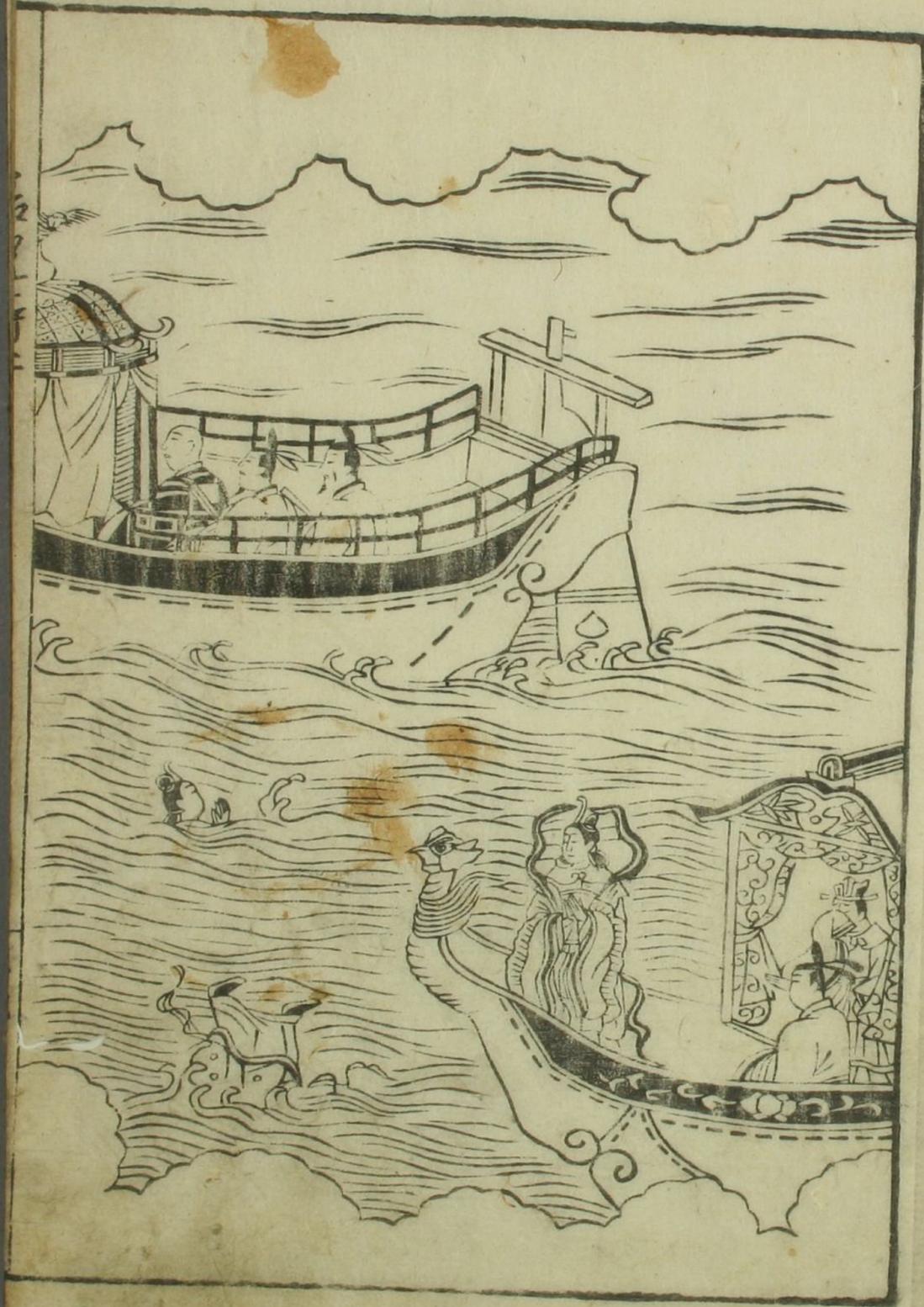




獲の彩のどあふぐりおびれおの動行せり
 これ得大聖おそのの面おのりあしはらて
 のらる奇物のあふぐり長と物をかり春屋
 て異今世國の可ん民とくく大林精舎に
 ねたよゆ候してまの程のこちに入らる
 しぬひ若きまのたおふとくはぬをま
 年月経てのら生れおのまのまのまの
 らあらしいされが月蓋長と痛の床にゆ
 しののまのあつらるまのまのまのまの
 くらんからまのまのまのまのまのまの
 おまの神あらしまのまのまのまのまの



よめりうらんは梅さるまのまのりあつらう富
 ちりももよこのまのりあつらう富
 けうの合れりうまごん中のまのりあつらう富
 のつらひさやうひあつらう富
 と報しももひさやうひあつらう富
 の茶殺れりうまごん中のまのりあつらう富
 れは帝位りうまごん中のまのりあつらう富
 あつらう富
 候のまのりあつらう富
 くめまよゆ依しまのりあつらう富
 らゆと海なしたまひ結縁のまのりあつらう富



て海はびくへくはつりいこのたのたれあれとく
 侍女のうらぶめ余りありつらまらひあまら海に
 にくらびとまらつてまらまらまらまらまらまら
 ここのつらつたれあまらまらまらまらまらまら
 ころころとまらまらまらまらまらまらまらまら
 とあつらつたれあまらまらまらまらまらまら
 渡りのつらつたれあまらまらまらまらまらまら
 國中はまらまらまらまらまらまらまらまら
 本はまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 あつらつたれあまらまらまらまらまらまらまら

